

# 「温故」第二十一号 後編

須佐郷土史研究会

温故二十一号発刊について

昨年発刊した温故二十号前編に続き後編をお届けします。  
時世は益々逼迫し、文久三年五月十日幕府は攘夷を決定する。長藩においても外敵の備えが急務となる。  
同五月十日第一次馬関戦争が起り、同五月二十一日長藩は京都堺町御門の警衛の朝命を受け、同五月二十二日第二次、同五月二十六日第三次と馬関戦争があり、同六月六日には高杉晋作が奇兵隊を編成する。同六月十八日毛利敬親は、益田親施を京都へ派遣する。

同八月十八日長州藩の京都堺町御門の警衛を停められ、七卿は罷免せられ周防に下る。

元治元年六月、京都池田屋の変に長州の切れ者吉田稔麿等闘死す

る。

同六月六日毛利元徳は小郡繁枝原に閱兵を行い、須佐兵参加する（仁保源助の件）。同七月六日益田親施は兵を率いて上京する。益田、福原、国司の三家老は京都男山八幡宮に会議する。

同七月十九日京都蛤御門の変が起り、来島又兵衛、久坂玄瑞、寺島忠三郎、入江九一、須佐兵田村育蔵、澄川謙蔵、中村惣治、中尾易三郎、中間清治等五名が戦死した。

同八月十一日益田親施は徳山惣持院に幽閉され、同十一月十二日自刃した。

以上の様な背景のもとで、須佐領内に於ける世相の一端が日誌に纏められている。

二十一号をもって日史録を閉じます。

発刊にあたり、古文書を読む会の皆様、事務局の御苦勞に対し深く感謝を申し上げます。

尚、誤判読についてはご指摘を願います。

二〇〇八年三月

須佐郷土史研究会

漢字は可能な限り原文を記載する。但し、異体や古体字、ウープ口のない字は現行の字に改め、あきらかな誤字は読解文において訂正した。

者江茂而与等の助詞は小文字を使用するが、ワープロでは右寄せ機能がないため左寄せとした。

〔注〕HP復刻版では「小文字」は使用せず、これらの文字は全て本文と同じフォントサイズとした。

闕字は一字あけとした。

表紙は益田家本門の解体前の記録写真を掲載。（複製版では「温故」第二〇号と同じに付省略した）

なお、「温故」第二十一号の偶数頁に原書の毛筆写真、奇数頁に「積文例」が掲載されている。複製版では毛筆写真はデータ量が大き過ぎるため省略した。よって頁を【2、3頁】の如く表し、「温故」と頁表記が一致するようにした。

資料提供

従文久 戊辰年正月至三元治子年十二月 日史録

〔萩市大字須佐 伊藤清久氏〕

参考文献

用字用語古文書の読み方(柏書坊)

実例古文書判続入門(名著出版)

実例古文書判続演習(名著出版)

山口県文化史年表

文久三（1863）癸亥四月

【2、3頁】

付つけたりり 上覽じょうらん済にかぎり置 のしの段 右役の者より  
受り候に付 前書の通り二して相済せ候事

一

上覽じょうらん一件相済かみ 上御退館之節 四頭しら日新堂之  
式台真ん前 下もがか輪江 年之順を以 御送り二罷り出  
御供頭ごくごうらより組頭中ぐもへと披露を受 惣組士之儀者  
筒井つづい通りより門際迄罷出 披露を受候事

付り 御出之節者 惣人数しう昼より罷出候に付 不居相

一付 頭かぶら中計り門内 下もが輪江 罷出候事

同日

一

鉄砲上覽相済候上 引続こくもとキ愛元惣稽古人数

上覽じょうらん天皇や貴人がご覧になると

日新堂(育英館内の講堂)

筒井つづい弁戸のかこい

愛元あいもと (仇処許)私のほう、自分の所

【4、5頁】

一同いどう二劔法野試合稽古懸り 上覽被仰付候事

付つけたりり 右相済候上 證人しやうじん一人宛其組之為そつだいとして 惣代劔法頭取中

江為えい一礼

差廻し候事

同廿九日

- 一 今日四組内中間并二御馬屋 御臺處 三固屋共 棒取り手上覽被仰付候二付 早朝より爰元罷り出候様 兼而令沙汰置候事
- 一 今朝上覽被仰付候筈之処 俄二御用湊有之 上覽之儀者御延引被仰付 當役中江 御代見被仰付与之儀 被仰出候に付 育英館於槍術場 代見有之候一付 同所

三固屋 中間部屋、馬屋、台処

【6之頁】

- 御用所江當役中 四頭ら入り交り 筆並を以着席いたし候事 裏判 柴田十郎右衛門 罷出候得共 同所
- 二ノ間頭ら着席 夫より四組八證人着席候事
- 右相済 證人兩人 中間中 無一礼 拙宅罷出候事

今日者上覽二而も無之儀一付 のし者差出不申候事  
 是迄頭ら之見分二而 爰元呼出候節 四組江酒式斗  
 四組之惟相二差遣し来り候得共 今日者頭ら之見分  
 二而者無之 御代見之儀一付 其儀無之候事

筆並 列記された書面の順番

文久三（1863）癸亥四丁五月

【8之頁】

五月六日

- 一 御間中新右衛門儀 先達而願書差出置候通り 今日忌明二付家督無 滞被仰出候段 證人迄申遣候様令沙汰候事
  - 右一礼とメ 新右衛門 氣分相二付 親類之者代とメ證人召連 拙宅罷出候事 付 御礼申出置候事
- 同七日
- 一 隱居家督願之事 一 養子縁職願之事 一 他国御暇願之事
  - 四組頭ら中

【10之頁】

右此度御詮議筋有之 御家来中 前書  
 願之廉 加判座引受二被仰付 加判役 益田  
 丹下 増野藤右衛門与 其時江當番江差出候様  
 被仰付候条 組内願書之儀も 右之心得を以 取揃  
 可有之候 右之外 願筋之儀者 是迄之通り 職座江  
 差出候儀 無間違候事  
 願書届之議者 是迄之通り無間違候事  
 付り 中間分死去 家督 其段申出有之儀八  
 是迄之通り職座申出無間違候事

- 一 御詮議筋有之 萩當役者 名目被差改 栗山

加判役（公文書に署名し判を押す地位にある者）

文久三（1863）癸亥五月

↑213頁

翁助 大田丹宮 増野作左衛門 年行司 加判 兼帯  
被仰付 右役座 已来 當役中与相心得候様被仰付  
候事 右之趣組内々々江沙汰被仰付候事

亥ノ五月

同廿五日

一 此度御上京二付 四組侍分八人 御供と被差登候二付  
人撰を以 一応附出候様申来り候二付 横田秀五郎 西尾  
壯助を附出候処 右兩人御供令沙汰候様申来り候二付  
令沙汰候事

右兩人共御受御礼申出候事

同廿七日

↑415頁

一 同断二付 御中間分 別紙之通り御供被仰付候条 御組内〃〃  
人柄御詮議相成 早速御沙汰可有之候 尤夏物斗り  
用意被仰付候 弥爾為用心 冬物心用意之儀者 勝手  
次第 且又未ダ弥御治定者不相成候得共  
御発駕御日取り之儀者 先づ来月六日比之御詮議  
一候間 いづれも其心得を以用意いたし候様 旁可有  
御沙汰候事

五月廿七日

覚

↑617頁

一 手明式人 但 手明 組之内 心得候部江御沙汰之事

瀬尻組ノ

益田丹下御附 孫平

一 組中間 七人

但當役座御附心得之部江御沙汰候事

一 同 四人

但 益田邦衛 右津伝右衛門 増野善左衛門 多祢順左衛門

江御附之分 心得候人柄合断

一 同 八人

但御供御手當人数 松本唯市 本尾官治 松原

齡助 内藤磋商 城一隼雄 多弥卯一 仲井

半四郎 俣賀昌左衛門 江御附之分 同断

↑819頁

同廿八日

一 右二付 手明組之内七人 其外江都合三人 令沙汰候事

御中間

孫平

伊右衛門

常右衛門

同手明組

同善右衛門気分相二付

善右衛門

弥三助

但無 據大病一付 差操之令沙汰候事

【2021頁】

同廿九日

巨那樣山口御留守中

一 巨那樣御上京之処 當分御延引一相あいなり成候段 山口より

申来り候 右二行御組内〃〃御供沙汰相あいな成候部江 前断

之趣御移し可有之 尤 此はかりがたく後火急二

御上京之程も難あいな斗候介 兼而かねて持 中間あいなと毛御供沙汰

相成 何時も遂 其 節候様 相心得居可 申段八能々

御沙汰相成被置候様存候事

右之通り四頭連名ニ申来り候事

【2223頁】

（文久三年六月五日）

同六月五日

中村泰一 有田彦右衛門 高津権之進・

梅津熊之進 伊佐槌 右川要左衛門

御中間

十郎右衛門 友右衛門 市右衛門 平右衛門

豊吉 良平 良助 直吉

右巨那樣御上京之御供被仰付候一符 令沙汰候事

【2425頁】

同七日

文久三（1863）癸亥六〇八月

此度御上京御供之内 自身甲冑持合せ有之

銘々八 持登り候様被仰付候段 沙汰被仰付置候処

都而御貸渡被仰付候間 持合せ之銘々たり共 不及

用意候様との御事一候条 御組内一兼而御沙汰

相成候銘々可有御沙汰候 以上

御組内西尾壯輔儀 近々

巨那樣御上京之御様子一候条 直様御供

相成候様 支度次第山口迄罷出候様 可有御沙汰候事

【2627頁】

同八日

一 中村泰市 爰元筆者二符 御供之処 御差操被仰付

代りと 熊谷千代槌江 御沙汰被仰付候事

同九日

一 明十日京都御供と被差登候二符 組頭暫役 松原惣左衛門江

被仰付候一符 彼者江組印引渡申候事

【2829頁】

同年八月廿九日 京都歸着仕候事 右二符

暫役 松原宗右衛門 より組印持せ参り候一符

受取置候事

同九月廿八日

一 西尾平右衛門 改名之儀 先日願出置候処 改名 平七 与

被遂御免候一符 證人代聞ニ令沙汰候事

文久三（1863）癸亥十一月

同十月六日

高津直七 跡式願之通り せづ権之進江 家督相続  
無相 違被遂御免与の儀二付 早速令沙汰候事

同廿一日

【3031頁】

一 西尾平七 父源右衛門儀 此度御當り相二付 改之儀  
願之通り 治左衛門与被遂御免候二付 令沙汰候事

十一月七日

兵糧人馬 緒方弥左衛門  
本々兼 小荷駄 梅地金助  
奉行筆者 以上

右之通り此度御上京二付 御供被仰付候事

同八日

増野作左衛門 横田 蔵  
筆者御附兼

右之通り前同断

御當り相 おんあたりあり文久三年七月二十八日、益田親施は弾正を改め右衛門介と改名した。屢々上杉弾正大弼の館に候するため同名を憚ったからである。（防長回天史第三編下四 三四四頁）このため「源右衛門」も「右衛門」を憚り「治左衛門」に改名したいという届け。

【3233頁】

一 此度御上京二付 組士御手當御供之銘々 四頭  
人撰を以令沙汰候様申来り候二付 頭中申合せ令沙汰候事

付り 中間分も同様二付 四證人より人撰いたし

候二付 夫々令沙汰候事

御手當人数左之通り

御先手小隊之部

伍長 大谷千代松 同 三浦常次 同 中村泰市  
梅津瀧之丞 栗山磋次 熊谷源内  
大谷宗之丞 二 品川順太 三 内田権平  
有田亀左衛 三浦好助 梅津熊之進

一ノ伍 大谷千代松 同 三浦常次 同 中村泰市  
梅津瀧之丞 栗山磋次 熊谷源内  
大谷宗之丞 二 品川順太 三 内田権平  
有田亀左衛 三浦好助 梅津熊之進

【3435頁】

長 横田好蔵 長 横田秀五郎 長 嶋 兵七  
大塚寅槌 内田正一郎 大石新太郎  
四 草野龜松 五 西尾壯輔 六 長嶺兵馬  
横田亥三郎 有田彦兵衛 高津政兵衛

長 品川平助 長 岩本武之丞  
波田文衛 尾崎忠助 高津武平  
七 尾崎忠助 八 増野弥市  
岩本勇馬 岩本愛之進

右御先手小隊 三拾四人

半隊司令 松原仁蔵  
右教導 岩本貫一郎  
左教導 岩本藤太

【3637頁】

遊軍隊之部

澄川謙蔵・中村重内・尾木七郎左衛門・高津良蔵  
大塚信平・高津圖助・増野宇作・平川善人  
高津善平・下伊三槌・高津権之進・中尾易三郎  
石川寅吉・梅津文内・中村藤馬・中村惣次  
板井菊蔵 拾六人

右之外拾六人者 新撰隊之内之御雇被仰付 一小隊二  
御組立相成候事

此五人於小隊之内更替

三浦甚四郎 板井菊蔵  
岩本忠之丞 吉田永太郎  
大谷助之進

【3839頁】

文久三年 十一月十一日

一 此度御上京之御供被仰付候部計り 於水海 行軍之操練

文久三（1863）癸亥十一月

被仰付候二行 朝七ツ時 育英館劔術場 御先手小隊之  
會処二兼而被仰出候二行 同処相揃 一応外勢留り月場  
札之処二积居 夫より五ツ時 御出懸 御式臺 於御板之間  
色々御意之旨被仰聞 尤 隊長計り 直様御馬上二而 水海  
御出二行 御備附前を以 大炮相図之上順々一手””  
押出し 大炮隊 御先手小隊 戦士隊 御旗本  
小荷駄隊 新撰隊 遊軍隊 与本町より 金子埜 通り  
水海 罷り越 於同処隊長之部被召出 於御前 軍師儀被仰付  
夫より追々引受場罷越 炮発など相濟

新撰隊（笠松社右側に記念碑あり）

【4041頁】

夫より於御前 惣人数一同 御意之旨被仰聞 直様  
越塔埜 より 海蔵庵 通り被 遊御帰館 無 滞相濟  
候事

付り 右操練二行 岩本貫一郎より申出候八 私儀

此度嚮道役被仰付候得者 自身笠陣羽織  
着用仕候而いかか可有御座哉之段申一行 いや／＼  
嚮導八銃隊之嚮導二而 引除之役二而者無之

候得者 勿論御貸笠着用之道理二候与 申聞せ  
候事 惣人数之儀者 兼而御定之通り 金鱗笠  
御貸陣羽織着用之処 此度之儀者 思 召も有之  
銃隊之儀二行 陣羽織着用不被仰付 笠計り御貸

嚮道役（道案内）

文久三（1863）癸亥九（十二月）

金鱗笠（笠が太陽に美しく輝く形容）

【42・43頁】

渡被仰付候事

九月十三日

（注：日付が九月に戻り、記述が前後している）

御中間

小右衛門事

善四郎

新右衛門事

次左衛門事

五郎右衛門事

文右衛門事

萬左衛門事

浅右衛門事

友左衛門事

市郎右衛門事

孫右衛門事

兵左衛門事

右之銘々 前書之通り改名仕度御願申出候間 宜様被成  
御沙汰可被下候 以上

中村五郎平

緒方弥左衛門

右之願出候二付 前書之通り 早速御免被仰付候事

改名

文久三年七月二十八日、益田親施は弾正を改め右衛門介と改名した。

屢々上杉弾正大弼の館に候するため同名を憚ったからである（防長回天史「第三編下四 三四四頁」）。このため、益田家中では名前が「右衛門」の中間が揃って改名を願ったもの。

【44・45頁】

十一月廿九日

御米方差引方

中村五郎平

前書之通り 本手紙を以申来り候二付 早速令沙汰

候事

十二月四日

一 内田権平儀 兼而内輪難洪二而候得共當

御時勢之儀二付 刀吉本新き鍛せ候得共 仕立之

処 自身之余力無之二付 無余儀拜借金之儀 願出候処

金吉両丈ケ 拜借被仰付候事 尤 刀仕立相調候上者

「借」の字は筆者の癖で「備」に似るが、「備」の書き方とは明らかに異なる。

付越借（「温故」20・102頁） 御借下被仰付向 104頁）

御備物（164頁）

拜借金（44頁）

拜借（44頁）

御借渡（66頁）

相備候事（164頁）

御備物（164頁）

御備物（164頁）

御備物（164頁）

御備物（164頁）

御備物（164頁）



【46・47頁】

内々頭見分被仰付候事

同十一日

三浦米と三郎 改名平三郎 内田勝三郎 改名正一郎  
与被逐御免候事

同十五日

後二見る

(707頁の「印此处二入る」の個所挿入)

御番當り二付 山口罷出 留守中頭之方 増野善左衛門江  
頼置候事 留守中 増野善左衛門方江之御沙汰  
左之通り

十二月十八日

中村五郎平

右やい氣分相二付 来子きたる元治元年ノ 引方役 御理 申出候处 氣分相  
無余儀事二付 願之通り被逐御免候事

【48・49頁】

同日

中村藤馬

右御殿御算用人被仰付置候处 彼者儀  
御上京之御供沙汰被仰付候二付 当年中二而 被成  
御引せ候条 此段可有御沙汰候事

御米方差引方 田村賀一

右之通り被仰付 御受御礼申出候事

文久三(1863)癸亥十二月

【50・51頁】

十一月二日 注何故か日付が戻っている

岩本平太弟 岩本貫一郎

右思おほしめし 召之旨有之これあり 瀬 廿尻組年寄座江 新知御取立  
被仰付 須佐住宅二被仰付候段 早速令沙汰候事

一 當秋御上京之節 御手當人数御勘渡 御手廻り

己上 月別金巻両宛被立下 四組士分 三歩被立下  
四組并諸中間分 式分宛被立下候 然る処四組士分  
於京都 拙者迄申出候趣者 當時諸色高直二付

【52・53頁】

甚迷惑仕 其上兼而内輪難渋者之儀二候得者

何卒一両宛被仰付被下候ハ 何志相生け之稽古  
なと不 仕候間 宜様御取計被下候様申出二付 同役  
本尾官次 増野善左衛門なと申聞せ候上  
可 致返答段申聞せ置候事

其後 同役中申合せ見候处 戒程當時勢

不平出来候而者 甚以不 宜旁二付 内々役座  
迄咄見候处 至極六ヶ敷儀二付 其段返答  
申不入候内 俄二御帰郷相成候事

【54・55頁】

同十月 日カ

一 御帰国後 組士より申出之趣者 先達而於京都御願申出候御勘渡之儀者 いかか相戒候哉 俄二御帰国之儀一付 御返答も得承り不申与申一付 節角其議内々當役座迄申出候処 彼方申分一者 諸半間共 其半間之者ならし勘渡と根之勘渡より少々減少ニ 渡方被仰付候 四組之儀者 根勘渡も都合三步足らす之議一候得者 脇並減少ニ別 而迷惑之儀一付 其當りを以渡方被仰付候得者 其上之処八 向渡方不仰付段

勘渡（下士に支払われる給与）

【5657頁】

返答之由申聞せ候処 左様而御座候哉 何分右様被仰付候而者 兼而難渋之者 至極迷惑仕候 脇方申合可 申由二而退去候事

同十二月

一 前断御勘渡之儀一付 覚書を以願出候文案 左之通り

覚

當夏 御上京之節 多人數御供被召連 且々奉 遂 其 節 難 有仕合一奉存候 然る処 半間

【5859頁】

御手當人数御勘渡銀 諸半間より八

別段減少一御立渡被仰付候 御本供人数之儀者 根御勘渡御定も可有御座候得共 御手當人数之儀者 不尋 常出役之議一候得者 御勘渡銀 乍 恐 士分いつれも同様可被仰付 儀哉と奉存候 既一浦賀御出役之節も 御勘渡同様の議一候処 此度 前断之通り 被仰付候一付而者 小身者何共湊筋不少 依之 此度之儀も 士分一統同様御立渡之儀 於彼地御願申出候処 何分之儀不被仰出内 無間

【6061頁】

御帰国一相成候次第一御座候 就而者 無餘儀 又々御願申出候間 前断之趣 篤与被 聞召分 何分共御手當人数之儀八 是非 一統同様之御勘渡一被仰付被下候様 奉願候 尤 同様被仰付議一候得者 勿論御勘渡銀之 増減二者 毛頭相拘り不申候 此段御序之節 宜様御取戒被成可被下候 奉頼候 以上 亥ノ十二月 四組

前書之通り相調 市丸組證人 岩本平左衛門

【6296頁】

拙宅迄持参一付 一心受取置 同役中可申合段 申入置 其節も身柄思附之処 申聞せ置候得共 勿論吉人之計一者不相成一付 受込置候事 其後 右覚書 頭中江入被見 追々申合せ見

一注

候処 孰も右願出之処 不<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>候得<sub>レ</sub>共 一<sub>レ</sub>心  
職座 益<sub>二</sub>田<sub>一</sub>三<sub>二</sub>郎<sub>一</sub>左<sub>二</sub>衛<sub>一</sub>門 江<sub>一</sub>も及<sub>レ</sub>内<sub>一</sub>談 其上<sub>レ</sub>脇<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>切<sub>レ</sub>者  
之<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>江<sub>一</sub>も及<sub>レ</sub>相<sub>一</sub>談 縮<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>処 四<sub>レ</sub>頭<sub>一</sub>中<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>席<sub>一</sub>而 四<sub>レ</sub>組  
證人 并 年<sub>一</sub>寄<sub>一</sub>中<sub>レ</sub>呼<sub>一</sub>寄<sub>一</sub>せ 前<sub>一</sub>断<sub>一</sub>願<sub>一</sub>書<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>儀<sub>一</sub>八  
諸<sub>一</sub>半<sub>一</sub>間<sub>一</sub>統<sub>一</sub>与<sub>一</sub>申<sub>一</sub>儀 左<sub>一</sub>候<sub>一</sub>得<sub>一</sub>者 御<sub>一</sub>勘<sub>一</sub>渡<sub>一</sub>銀<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>  
増<sub>一</sub>減<sub>一</sub>二<sub>一</sub>者<sub>一</sub>相<sub>一</sub>拘<sub>一</sub>り<sub>不</sub>申<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>候<sub>一</sub>八 下<sub>一</sub>難<sub>一</sub>洪<sub>一</sub>より<sub>レ</sub>申<sub>一</sub>儀

【注】62頁の写真では原本にある一ツ書きが切れて印刷されていない

### 【64.65頁】

二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>者<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>一</sub> 自<sub>一</sub>身<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>持<sub>一</sub>方<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>申<sub>一</sub>事<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>被<sub>一</sub>相<sub>一</sub>考<sub>一</sub>候 勿<sub>一</sub>論  
半<sub>一</sub>間<sub>一</sub>兼<sub>一</sub>而<sub>一</sub>夫<sub>一</sub>々<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>御<sub>一</sub>仕<sub>一</sub>戒<sub>一</sub>も有<sub>レ</sub>之<sub>一</sub> 夫<sub>一</sub>二<sub>一</sub>心<sub>一</sub>じ  
御<sub>一</sub>勘<sub>一</sub>渡<sub>一</sub>も同<sub>一</sub>様<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>事<sub>一</sub>候<sub>一</sub>得<sub>一</sub>者 當<sub>一</sub>御<sub>一</sub>時<sub>一</sub>勢<sub>一</sub> か<sub>一</sub>様<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>  
持<sub>一</sub>方<sub>一</sub>(六)ケ<sub>一</sub>敷<sub>一</sub>儀<sub>一</sub>申<sub>一</sub>出<sub>一</sub>候<sub>一</sub>而<sub>一</sub>者 甚<sub>一</sub>不<sub>一</sub>相<sub>一</sub>濟<sub>一</sub>候<sub>一</sub>条 何<sub>一</sub>分<sub>一</sub>此<sub>一</sub>儀<sub>一</sub>  
差<sub>一</sub>止<sub>一</sub>候<sub>一</sub>而<sub>一</sub>可<sub>一</sub>然<sub>一</sub>与<sub>一</sub> 其<sub>一</sub>外<sub>一</sub>色<sub>一</sub>々<sub>一</sub>四<sub>一</sub>頭<sub>一</sub>より<sub>レ</sub>申<sub>一</sub>聞<sub>一</sub>候<sub>一</sub>得<sub>一</sub>共  
落<sub>一</sub>着<sub>一</sub>附<sub>一</sub>兼<sub>一</sub>候<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub> 何<sub>一</sub>分<sub>一</sub>此<sub>一</sub>覚<sub>一</sub>書<sub>一</sub>取<sub>一</sub>次<sub>一</sub>候<sub>一</sub>様<sub>一</sub>相<sub>一</sub>成<sub>一</sub>  
不<sub>一</sub>申<sub>一</sub>候 乍<sub>一</sub>亦<sub>一</sub>難<sub>一</sub>洪<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub> 少<sub>一</sub>々<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>御<sub>一</sub>心<sub>一</sub>附<sub>一</sub> 被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>候<sub>一</sub>様  
な<sub>一</sub>か<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>願<sub>一</sub>候<sub>一</sub>得<sub>一</sub>者 随<sub>一</sub>分<sub>一</sub>戒<sub>一</sub>丈<sub>一</sub>ケ<sub>一</sub>取<sub>一</sub>計<sub>一</sub>以<sub>一</sub>見<sub>一</sub>候 半  
与<sub>一</sub>色<sub>一</sub>々<sub>一</sub>申<sub>一</sub>聞<sub>一</sub>せ<sub>一</sub>候<sub>一</sub>処 其<sub>一</sub>日<sub>一</sub> 縮<sub>一</sub>る<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>私<sub>一</sub>共<sub>一</sub>計<sub>一</sub>り  
二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>も無<sub>一</sub>御<sub>一</sub>座 在<sub>一</sub>郷<sub>一</sub>住<sub>一</sub>宅<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>江<sub>一</sub>も得<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>申<sub>一</sub>合<sub>一</sub>せ 有<sub>一</sub>無<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>  
御<sub>一</sub>返<sub>一</sub>答<sub>一</sub>可<sub>一</sub>申<sub>一</sub>上<sub>一</sub>る<sub>レ</sub>由<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>引<sub>一</sub>取<sub>一</sub>候<sub>一</sub>事

### 【66.67頁】

増<sub>一</sub>野<sub>一</sub>善<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門<sub>一</sub>宅<sub>一</sub>出<sub>一</sub>席 松<sub>一</sub>本<sub>一</sub>良<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門<sub>一</sub>本<sub>一</sub>尾  
官<sub>一</sub>次<sub>一</sub>身<sub>一</sub>柄<sub>一</sub>都<sub>一</sub>合<sub>一</sub>四<sub>一</sub>人 證<sub>一</sub>人 岩<sub>一</sub>本<sub>一</sub>平<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門<sub>一</sub>岩<sub>一</sub>本  
平<sub>一</sub>太<sub>一</sub>岩<sub>一</sub>本<sub>一</sub>貫<sub>一</sub>一<sub>一</sub>郎<sub>一</sub>右<sub>一</sub>川<sub>一</sub>与<sub>一</sub>三<sub>一</sub>兵<sub>一</sub>衛<sub>一</sub> 年<sub>一</sub>寄<sub>一</sub> 仁<sub>一</sub>保

文<sub>一</sub>久<sub>一</sub>三<sub>一</sub>(1863) 癸<sub>一</sub>亥<sub>一</sub>十<sub>一</sub>二<sub>一</sub>月

源<sub>一</sub>助<sub>一</sub>松<sub>一</sub>井<sub>一</sub>九<sub>一</sub>郎<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門 以<sub>一</sub>上<sub>一</sub>六<sub>一</sub>人

一 前<sub>一</sub>書<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>儀<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub> 追<sub>一</sub>々<sub>一</sub>在<sub>一</sub>郷<sub>一</sub>申<sub>一</sub>合<sub>一</sub>せ 縮<sub>一</sub>る<sub>レ</sub>処 覚<sub>一</sub>書  
無<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>二<sub>一</sub> 口<sub>一</sub>達<sub>一</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>一</sub>願<sub>一</sub>出<sub>一</sub>候<sub>一</sub>趣<sub>一</sub>者 四<sub>一</sub>組<sub>一</sub>内  
難<sub>一</sub>洪<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而 其<sub>一</sub>上<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>色<sub>一</sub>高<sub>一</sub>直<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub> 甚<sub>一</sub>迷<sub>一</sub>惑<sub>一</sub>仕<sub>一</sub>候<sub>一</sub>間  
何<sub>一</sub>卒<sub>一</sub>少<sub>一</sub>々<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>も 御<sub>一</sub>心<sub>一</sub>附<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>も 御<sub>一</sub>借<sub>一</sub>渡<sub>一</sub>二<sub>一</sub>而<sub>一</sub>も  
被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>被<sub>一</sub>下<sub>一</sub>候<sub>一</sub>様 松<sub>一</sub>本<sub>一</sub>良<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門<sub>一</sub>宅<sub>一</sub>迄 緒<sub>一</sub>方

### 【68.69頁】

一 弥<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門<sub>一</sub>岩<sub>一</sub>本<sub>一</sub>平<sub>一</sub>太 両<sub>一</sub>人<sub>一</sub>願<sub>一</sub>と<sub>一</sub>罷<sub>一</sub>出<sub>一</sub>候<sub>一</sub>由<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub>  
早<sub>一</sub>速<sub>一</sub>四<sub>一</sub>組<sub>一</sub>中<sub>一</sub>申<sub>一</sub>合<sub>一</sub>せ 前<sub>一</sub>書<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>通<sub>一</sub>り<sub>一</sub>願<sub>一</sub>出<sub>一</sub>候<sub>一</sub>事  
一 四<sub>一</sub>月<sub>一</sub>八<sub>一</sub>日 此<sub>一</sub>廉<sub>一</sub>前<sub>一</sub>後<sub>一</sub>二<sub>一</sub>者<sub>一</sub>候<sub>一</sub>得<sub>一</sub>共 已<sub>一</sub>後<sub>一</sub>為<sub>一</sub>見<sub>一</sub>渡<sub>一</sub>此<sub>一</sub>処<sub>一</sub>二<sub>一</sub>記<sub>一</sub>又  
以<sub>一</sub>手<sub>一</sub>紙<sub>一</sub>得<sub>一</sub>御<sub>一</sub>意<sub>一</sub>候 去<sub>一</sub>夏<sub>一</sub>御<sub>一</sub>上<sub>一</sub>京<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub> 四<sub>一</sub>組  
侍<sub>一</sub>分<sub>一</sub>為<sub>一</sub>御<sub>一</sub>手<sub>一</sub>當<sub>一</sub>御<sub>一</sub>供<sub>一</sub>被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>候<sub>一</sub>処 火<sub>一</sub>急<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>儀<sub>一</sub> 殊<sub>一</sub>一<sub>一</sub>當<sub>一</sub>時<sub>一</sub>  
諸<sub>一</sub>色<sub>一</sub>高<sub>一</sub>直<sub>一</sub>二<sub>一</sub>行<sub>一</sub>而<sub>一</sub>者 一<sub>一</sub>統<sub>一</sub>難<sub>一</sub>洪<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>時<sub>一</sub>節<sub>一</sub> 迷<sub>一</sub>惑<sub>一</sub>筋<sub>一</sub>不<sub>一</sub>少<sub>一</sub>  
様<sub>一</sub>相<sub>一</sub>聞<sub>一</sub>へ<sub>一</sub>依<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>格<sub>一</sub>別<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>御<sub>一</sub>詮<sub>一</sub>議<sub>一</sub>を<sub>一</sub>以<sub>一</sub> 御<sub>一</sub>心<sub>一</sub>附<sub>一</sub>銀<sub>一</sub>被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>候  
員<sub>一</sub>數<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>是<sub>一</sub>い<sub>一</sub>細<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>議<sub>一</sub>者 本<sub>一</sub>役<sub>一</sub> 金<sub>一</sub>山<sub>一</sub>太<sub>一</sub>左<sub>一</sub>衛<sub>一</sub>門 尤<sub>一</sub>沙<sub>一</sub>太<sub>一</sub>  
相<sub>一</sub>成<sub>一</sub>居<sub>一</sub>候<sub>一</sub>条 於<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>方<sub>一</sub>受<sub>一</sub>方<sub>一</sub>せ<sub>一</sub>し<sub>一</sub>免<sub>一</sub>候<sub>一</sub>様<sub>一</sub>被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>候 尤<sub>一</sub>此<sub>一</sub>度<sub>一</sub>  
之<sub>レ</sub>儀<sub>一</sub>八<sub>一</sub>已<sub>一</sub>後<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>引<sub>一</sub>例<sub>一</sub>二<sub>一</sub>者<sub>一</sub>不<sub>一</sub>被<sub>一</sub>仰<sub>一</sub>付<sub>一</sub>候<sub>一</sub>条 旁<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>趣<sub>一</sub>御<sub>一</sub>組  
内<sub>一</sub>々<sub>一</sub>江<sub>一</sub>可<sub>一</sub>有<sub>一</sub>御<sub>一</sub>沙<sub>一</sub>汰<sub>一</sub>候 以<sub>一</sub>上

### 【70.71頁】

右<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>通<sub>一</sub>り<sub>一</sub>四<sub>一</sub>組<sub>一</sub>中<sub>一</sub>一<sub>一</sub>通<sub>一</sub>二<sub>一</sub> 授<sub>一</sub>有<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>候<sub>一</sub>事

一 印<sub>一</sub>此<sub>一</sub>処<sub>一</sub>二<sub>一</sub>入<sub>一</sub>る (46.47頁の「後一見<sub>一</sub>る」を<sub>一</sub>此<sub>一</sub>処<sub>一</sub>に<sub>一</sub>挿<sub>一</sub>入<sub>一</sub>)  
一 来<sub>一</sub>正<sub>一</sub>月<sub>一</sub>三<sub>一</sub>日 御<sub>一</sub>物<sub>一</sub>初<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>御<sub>一</sub>規<sub>一</sub>式<sub>一</sub> 當<sub>一</sub>時<sub>一</sub>別<sub>一</sub>而 廉

元治元（1864）年甲子一月

御減少二付 御物初之処も是迄五人之処 吉人二  
被仰付候段 先達而 移し相成候二付 頭中申合せ  
此御規式 其儀者脇方の儀共 違 當時別而肝要  
之御規式 其上平日組士之稽古之御引立一毛相成  
彼是二付 此迄之通り五人二被仰付候様願出置  
候処 至極 尤之儀被思 召 是迄之通り五人と  
高嶋流筒二而 吉人三発二被仰付候段 御沙汰  
被仰出候事

付り 射術之儀者 當夏より射止二相成居候二付  
弓法は無之候事

7273頁

二月廿日元治に改元

文久四年子ノ正月山口御番留守中（元治元年1864）

正月二日

一 例年 今二日 組士射初いたし来り候得共 留守中  
二 其儀無之候事 尤 當年之儀八 時勢向二付 脇頭二毛  
其儀無之候事

同二日

一 今朝定例之御物初御規式二付 鉄砲組左之  
通り

西尾壯輔

梅津熊之丞

7475頁

有田彦兵衛

内田権平

○ ○

内田正一郎  
前書の通り手際有之候二付 増野善左衛門 より三ツ物  
手際二付 扇子折紙差出置候二付 追而身柄帰宿之上  
扇子三宛 三ツ物兩人江差遣し候事

正月十八日山口より帰着いたし候事

同廿八日

一 此度佛坂関門御普請二付 御中間 小左衛門 持懸り

三ツ物（貝、鐘、太鼓）

佛坂石州との境、島根県境

7677頁

之田地 御用地と被召上候 左候而 右土地敷数彼  
是改被仰付候条 年寄り證人出張二而 取 捌可 致  
郷よりも庄屋畔頭 立合被仰付候条 旁之趣  
申来り候二付 早速令沙汰候事  
付り 本文御用地二被召上候二付而者 替り  
地之儀者 追而御詮議詰之上 何分之御沙汰  
被仰付候事

注 同十九日

注 同は二月のよか？

一 大谷七右衛門 知行地 先年被召上 其已来 下田万

【7879頁】

村郷地二相成居候処 此度御詮議之趣有之  
瀬尻組二被仰付候条 此段令沙汰候様申来  
候二付 早速令沙汰候事

尚々 本文の土地 年寄 證人 地下打廻り・  
庄屋 畔頭 立合二而 受取渡し被仰付候事  
其已後 右田地 岩本貫一郎 知行地二頂戴  
被仰付候事

付り 右田地 拾五石前二而有之候二付 壹石処八向人  
持添餘石二御預ケ被仰付候事

【8081頁】

尚々 岩本貫一郎知行地之儀 先達而 組内  
年寄 證人申付 都合持添餘石之分 令詮  
議 附出被仰付候得共 此度之儀 右明地有之  
候二付 是迄持添之儀者 不被及御沙汰候事

三月十日

西尾壯輔儀 山口筆者見習と 於尔時被召出  
候段 御沙汰相成候事

四月六日

一 岩本貫一郎 眼病為保養 宮市罷越度段  
御願申出候処 願之通り往来十日の御暇御免

元治元（1864）年甲子二丁五月

於尔時「尔時」(ときには)はそのときとも読む。

【8283頁】

相成候事

五月十一日

一 板井十郎左衛門儀 難渋二付 借銀之儀 歎出  
之趣 當御時節 容易二難被及御沙汰之  
事一候得共 極々難渋之儀 連々相聞へ無  
餘儀事二付 格別之御詮議を以 八 三百目  
御貸下ケ被仰付 返納之儀者 當暮より五朱利附  
拾ヶ年否二被仰付候条 令沙汰候様申来り  
候二付 早速令沙汰候事

尚々 於御銀子方渡方被仰付候事

八 (八十文錢八 錢)銀一匁に対する京錢(鑓錢)の比価より発生  
した銀本位の文錢勘定法で、鑓錢八十文を銀一匁として計出した銀価  
を意味する。  
五朱利(年利15%)。25兩二付月利5朱といふ意味。従って100兩につき  
月20朱。年間で240朱。即ち15兩(60分)。

【8485頁】

同十八日

一 御中間 弥助 御目代方打廻り役 被仰付候事

元治元（1864）年甲子五、六月

同廿八日

一 於山口二 操練前二付 御先手同方小隊人数 ならびに 并 遊軍隊  
人数 於稽古場二 一 間一紙筒 調 尚御筒みがき  
と 差出候事

笠并 一 諸道負共二 岩本貫一郎 申付借 44頁注参照 受置候事  
遊軍隊惣詰 本尾官次 留守中二付 大谷岩尾 暫役  
被仰付候事

一 市丸證人 岩本平左衛門 須佐地證人暫役  
石川与三兵衛 一同一拙宅罷出候处 稽古場出勤

【60687頁】

留守二付 同处罷出申候趣者 は 此度操練之節 こたび  
四組士中 孰も自身笠二被仰付被下候様申一付 身柄申八 増野勝太  
夫ハいかが之次第二候哉 四組士之儀者 已前より之  
御法も有之 金鱗笠御貸之儀者 此度相初り は  
候二而も無之 是迄度々着用之儀を 此度一限り こたひ  
自身笠二任度与申出候而も 右様二者被仰付間敷与  
申候处 平左衛門申八 金鱗笠之儀八 小者二紛れ まじく  
甚心外一奉存候 何卒自身笠二被仰付被下候様 くたされ  
種々申候得共 右様八被仰付間敷候 乍 尔身柄吉人 しから増野勝太  
之落着一毛及不申候得者 遊軍隊惣詰暫役 松原  
平左衛門 江申聞せ 尚同役中 可申合与申入被置候事

【60688頁】

一 右一件 松原平左衛門 申合せ 惣揮見合之暫役  
増野作左衛門 江も致相談候处 縮る处 古例之  
通り御貸笠二被仰付 自身笠二者不被仰付段申一付  
直様松 松原平左衛門 平同道二而 拙宅二而右両證人を呼寄せ  
候处 岩本平左衛門 出違候由二而 石川与三兵衛参り  
候二付 前条之通り申聞せ候事

六月朔日 一日

一 同夜 岩本平左衛門 岩本貫一郎 両證人拙宅江参り  
候得共 折柄出違二付 松本良左衛門 宅者江 右両人参り  
申候趣八 今 石川与三兵衛 工被仰聞候趣 爰元二而  
申合せ見候得共 爰元二而も落 着成 難 其上在郷之

【60689頁】

者江も聞せ不申而者 もつさず 縮る处 つまるところ 難申上候二付 其段一応  
申上候与申一付 良左衛門 尚 身柄両人 増野勝太 色々申聞せ  
候得共 都合前断之参り懸り二付 難 成落着 何 なりがたく  
明朝惣人数出浮之上得与可申合二而引取候事

出浮田かけ

同二日

一 今朝正七ツ時 四時 育英館劔術場 御先手人数  
相揃候上 岩本平太 岩本貫一郎 右両人より申出  
候趣八 何分在郷之者申合せ見候处 是非共二  
自身笠被仰付被下候様申一付 身柄申八 御法も 増野勝太

【926頁】

これある 有之儀二候得者 何も御貸笠着用仕候様色々  
 申聞せ候得共 一向不聞入二行然山口迄之処八  
 銘々御貸笠持参仕 於山口二御伺上 何分之儀被仰出  
 候間 夫迄之処令勤弁候様申聞せ候得共  
 是又引受不申二行 然是迄御貸渡被仰付  
 来り候笠者 身柄之心得を以自身笠二者得不申付  
 候間 是非着用不相成儀二候八 覚書以願出  
 候八 夫迄之処身柄之計二毛可致段申  
 候八 右兩人脇方申合 成程覚書差出  
 候様被仰付 何先承知仕候 何分今日之処八  
 時刻も相移候儀二候得者 夫なしニ被差出くれ

【946頁】

候八 山口着次第 覚書相調差出可申  
 与被申候得共 是非共覚書無之候而者  
 只今之処不相済与申内 最早五ツ時分二毛相成  
 諸隊順行を以押出又儀二候得者 諸隊之  
 防 不大方二行 然今日之処八 平太責一郎 兩人  
 受合候八 笠之儀此方之捌と可致与申聞せ  
 候八 孰も慥一受合不申段申事二行 直様

元治元（1864）年甲子六月

右笠三十式枚小荷駄江手明を以差出し  
 遊軍惣詰 松原平左衛門 江も右之段相移候事  
 笠之儀八送りニ相成候事

【969頁】

一 三番大砲相図二而 御先手より順々押出し 七ツ時  
 萩保福寺着 同寺二而止宿候事  
 同三日  
 一 今朝五ツ時萩出立二而 七ツ時山口着 一応木町 頭らへ  
 一隊之人数相揃 惣詰志人宛 法界寺御旅館江罷出  
 御伺申上 夫より手引有之候二行 銘々宿江着宿候事  
 同四日

【986頁】

一 今日須佐二而申付置候覚書と 早速差出すやく定二而  
 候得共 実八書附不差出与 御貸金 着用二而相済事二  
 候八 無比上も事存附候二行 其さいそくいたし  
 不申候事  
 付り 須佐二而申出之一件 不残惣軍見合せ 益田  
 丹下 尚組頭同役 本尾官次 大谷岩尾 江も  
 咄し置候事 何も自身笠着用之処 不同意二  
 被存候由之事

元治元（1864）年甲子六月

付り 明五日 於繁枝 惣調有之筈候処 雨天  
一付 御延引二相成 明後五日二有之候事

同五日

一 笠之儀 岩本甚市 岩本平太 其外切者之者江  
此度操練之上二而相願候外 宜可有之与  
官次 尚身 柄兩人々色々申覚し候得共 一向聞

↑00101頁

不申此 上八覚書之外 致 方有之間敷与存候内  
同日此度操練二付 御意之旨被仰聞 多人數  
之儀二付 一隊〃〃〃〃 惣詰よりよ聞せ候事  
同日七ツ時 覚書相調 一応 本尾官次 処江持参二而  
候得共 官次格別之存寄無之二付 身 柄処江持参二付  
一 一応令被見候事 覚書左之通り

今般之操練二付而者 半間 御供之面々 役附 尚  
隊伍之小頭之外者 金鱗笠附具足 御貸渡  
被仰付候段 先達而 被仰出候 然る処其後

↑00103頁

思 召之旨有之 此度之操練二付而者 銘々是  
ならバ 快 可遂実戦と覚悟極メ候支度  
勝手次第二被仰付候段 又々被仰出候 就而者

右金鱗笠之儀 不便利之廉モ有之候二付  
後被仰出候通り而 孰モ可遂 其 節覚悟罷居  
候間 何卒願之通り 被仰付被下候様御取計  
被成可被下候 奉頼候 以上

元治元年  
子ノ六月

四組  
御供中

右覚書之内二 思 召之旨有之 此度之操練二付而者

↑04105頁

銘々是ならバ 快 可遂実戦と覚悟を極メ候支度  
勝手次第二被仰付候段 又々被仰出と有之候得共 其儀八  
一向被仰出八無之候 乍 尔 本尾官次 咄し之内々二  
身 柄支度八劔術之胴二小手かふ之なり咄 其外  
脇二者 小手計り之 胴計り之と云事を咄し候由之事  
已後 為見渡 記置候事

一 右覚書得与被見せし免 又々 平太・實一郎・  
岩本藤太・中村泰市 四人を呼寄せ 身 柄一甲八  
覚書之趣委細令承知候 乍 尔 是迄度々申通り

↑06107頁

此度之儀八 御貸笠着用二而操練相濟候上  
暖々と覚書共差出候外 至極都合もよ路し  
く事二候間 いかが一候哉 已二今日 御意之旨も有之



いすれ  
孰も承知之前一候得共、只今覚書差出候而者  
何分之儀被仰出間敷も難計候得者、是非共二  
覚書之処、差止く連候様身柄より咄度頼候間  
何分も右様いたしく連候様、置重入割申聞せ  
候処、平太申八私計り之儀二而も無之候得者、左様も  
難相成与申二付、然、八右四人共銘々手分ニ  
惣人数申合せ、何分共覚書なしニ相済候様

↑108 i 06頁

いすれ  
申付候処、何も又々脇宿罷出、追々申合せ候事  
一 夜二入五ツ時、右四人共罷り歸り申候趣八、節角御氣  
付之処、惣人数申合せ見候処、何分多人数之儀二付  
御思召通り二落着附兼申候間、是非覚書之三八  
被差出被下候様願二付、然、八致方無之候、覚書  
を八差出可、申与申入、直様、本尾官次、同道二而  
益田丹下、処江罷出、右覚書を差出候処、委細  
致承知候、覚書を八差出不申而よ路しく候、早速  
可申上由返答有之候事  
付り、為心得、覚書を八可、致内見由二付、一応見せ

↑10 i 11頁

候事 合点する、これなく  
受込八無之候事

一 同四ツ時、御用之儀有之候条、只今法界寺罷居

元治元（1864）年甲子六月

候様申来り候二付、當役中揃而被申候八、只今  
組士兩三人召連罷出候様、授有之候二付、岩本平太、  
岩本藤太、中村泰市、召連同寺罷出候、官次  
方江も同様二付、中村重内、尾木七郎左衛門、澄川謙三、  
三人召連、直様同寺罷出候事  
一 当役、大谷丹宮、御二ノ間詰居二而、頭ら兩人、組士  
召連、御二ノ間江罷出候と申二付、官次、并身柄罷出  
組士六人御二ノ間末罷出候上

↑12 i 13頁

御意之旨者、官次、勝太、此度操練二付、貸笠  
之儀、兎哉角申出候由、何連二而も右之笠着用  
不参者之儀八、只今より領分差返し候様、用事無之段御直二  
被（被）仰出候二付、何も謹て平伏仕候内、重而  
御意之旨者、最早時刻も相移り、直様出張之儀二  
候得者、夫ノ三而、及遅刻候而者、第一不忠之至り  
不相濟事二候得者、左ノ三待八たし不申由  
被仰出候二付、勝太より組士江申聞せ候趣八  
只今御意被仰聞候通り候得者、此上いか仕候哉  
其趣身柄迄申出候様申聞せ候得共、孰も平伏

↑14 i 15頁

ノ三而有無之らち明不申二付、身柄より人別  
押二、七郎左衛門儀八、以かが哉と尋候処、着用仕御供  
申可上与申二付、夫より人別右之通り、二人共相済候二付  
然、八伍組之人数之処も右様受合候哉と、仕候処是又受合二付

元治元（1864）年甲子六月

処 御目二符 何も咤しかられ候事

増野勝太  
身み柄へより申上候八 何も御貸いすれ笠かさ着き用仕

謹まこと而御供可申上段申候事 左候而 直様右六人共  
下くだらせ候事 官次身くわんじみ柄へ共下り懸候内

御意之旨被仰聞候趣八 右笠之儀二符 何とも理不ことごとくに  
申まをつつのり候二符而 其方兩人共苦心こころむく二而 至極心こころ配はり

被仰聞 重畳難有奉存候事 直様下り候事  
付り 當役中御前詰二而 右之御意被聞 御授り二而

↑16117頁

候処 最早相凶之炮発有之候二符 御供之役人中  
孰たしかしも下り 丹宮計り詰居候事

同廿六日

一 大炮相凶有之候二符 兼而被仰出候通り 法界寺門前江  
揃居諸隊相揃候上 御屋形前町少々上之方江  
月場札之処江扣居候事  
付り 旦那様二者御移二符直様法界寺より後通り

御出殿候事

一 今朝雨天二而 只様御見合せ相成 四ツ時よより快晴二符 九ツ時こ  
山口御発賀がわ 行軍之御備二而 柳井田通り繁枝江

↑18119頁

十六時半  
七ツ半時御着陳之事

付り 今日道中二而 御先手人数 袴之裾くゝらす候

一 御内輪之御一手江八 鯖埵之方敵引受二  
被仰付由之事 御先手小隊之儀八 御本門御固被仰付  
組士四人宛交代二して 勿論鉄炮持参二而 門口詰居  
候事 同夜宿陣候事

同七日 注六月か？

一 今早速於同処 濱際二而調練相調 御内輪之儀  
御先手小隊しんせんたい新撰隊集ての中隊二して 御直二  
御指被遊候 御運道相済 九ツ時二こ御陣処迄御帰り  
二而 昼仕廻相済 直様御引揚二而 夜五ツ時山口御歸館候事

↑20121頁

同八日

一 右一日山口滞留二而 諸品しよひん夫々相納候事

同九日

一 今朝六ツ時 同処出立二而 七ツ時萩保福寺罷り帰り候事  
同寺二而 仕廻相調 夜五ツ時乗船二而 同十日朝須佐  
罷り帰り候事

付り 御貸笠并一鉄炮之儀 孰も自身持歸る筈之処  
此度之儀八 続而被对苦勞 送り方被仰付候事  
付り 船之儀八自身負之事 乗船不仕者之儀八  
歸り懸 拙宅相届ケ候事

↑22 i 23頁

同日比ころ

一 此度御先手人数 山口より繁枝占之道中 小袴之  
裾あしなりくはらなる部多人数有之これあり 甚はなはだ 不仕度之段 不都合と  
相成 右人数中 孰いすれも差さしひかえ扱江申出候事

日那樣 爰ここもと元御滞留中

六月十三日

一 今日御用儀有之これあり候二付 御土居罷出候様申来り候二付  
四頭ら罷出候処 先般操練之節 御貸笠之儀一付 不都合  
合之申出 甚はなはだ不謂事一付 依これによつて之右荒立人数中御詮議

↑24 i 25頁

被仰付候段 一 応勤場二而内諭有之これあり 直様於御殿  
御殿御直二右詮議四頭ら江御満かせに被仰付  
候事

此度御詮議人数左之通り

岩本平太・岩本貫一郎・中村泰市・尾木七郎左衛門・  
中村重内・岩本平左衛門・石川與三兵衛・中尾易三郎・  
仁保源助以上  
九人

御殿=親施のよは殿とは言わず日那樣故、御殿の後の御殿は衍字と考える。

元治元（1864）年甲子六月

右人数者人江固周かため？してと船頭細工人無給細工人  
江限り 壹江三人宛被差出候事

固會護

↑26 i 27頁

一 岩本貫一郎 御用之儀有之これあり候条 只今拙宅  
罷出候様申遣し 貫一郎（入来之上此度御詮議  
之旨有之これあり候二付御尋被仰付候二付 今日より町宿堀林左衛門宅  
滞留被仰付候 尚御詮議中 親類縁者其外他人  
相对被差留 固周 両三人被成仰附  
候段 令沙汰候処 御請申上候由二付 直様町宿  
堀林左衛門宅江下り候事 中村泰市儀も 宮内勝蔵宅 都合  
同様に住二付 明日出次第右之令沙汰候事 町宿  
須山慶蔵

貫一郎へ

泰市へ

長谷川利吉  
野上 吉蔵  
柴田 筆吉

藤井徳太郎  
堀大谷助五郎 吉松

同十四日

↑28 i 29頁

一 今日於大蘆寺 御詮議被仰付候二付 御詮議中 公私之  
佛参被差留 出張人数左之通り

元治元（1864）年甲子六月

四頭用遣人 御目代 波田與市 栗栖鬼見使

品川半吾・橋本倉次 野原定吉

組中間 四人

↑30131頁

一 御詮議中 四頭ら主居 御目代 給使 客居  
着之上 御詮議之組士 二ノ間頭ら呼出 詮議候事

右之通りニ而 十四日 同廿三日夜 御詮議相濟 巴政堂邑力

罷出 御詮議之趣申出 旦那様ニ毛同処御出座ニ而  
被聞こしめしめはされ 召上 四頭ら中江 孰も詮議振ふひ行ゆき

届続 而心配候段 御意之旨被仰聞 退去被仰付候事

↑32133頁

同四日廿四力

一 右御詮儀詰二成

身柄禁足隠居  
知行半知減少 岩本平太

知行半知一減少 岩本貫一郎

岩本

平左衛門・尾木七郎左衛門・中村泰平・中尾易三郎  
孰も逼塞いづれ ひっそく被仰付候事 中村重内 慎三被仰付候事

石川與三兵衛

重罪一付切腹被仰付候事  
仁保源助

↑34135頁

同四日廿四力

一 右之者事 此度笠一件二付 甚不謂作廻仁保源助 御詮議詰二付  
切腹被仰付候二付 前日御土居罷居候様申来り候二付  
罷出候処 大谷岩尾組内之儀二付 勿論同人被差出  
身増野勝太柄儀相添被差出候段 御内々ニ而御沙汰有之候事

同五日廿五力

一 今朝胸服当袴はかま着用ニ而 道具持召連一応御土居罷  
出候処 追々出張役人相揃 浄連寺出張ニ而 於

胸服(羽織)

↑36137頁

同寺割腹被仰付候事

付り 源助親類兩人 緒方弥左衛門 右川與三兵衛

呼出ニ而 源助儀御用之儀有之候条 只今當寺同道

ニ而罷出候様 令沙汰候処 同人同道ニ而出寺之上

御沙汰書 證人より讀聞せ候処 御受申上

候事 左候而 敷物何か之用意親類取捌

被仰付候事

須佐地組頭  
大谷岩尾

出張役人左之通増野勝太

入江忠左衛門御目代

波田與市御目代

↑38136頁

城市儀兵衛陸目付

棕重蔵證人催相と

高津伊太郎介しやく

高津茂平同添役

御馬屋新助後附

御組ノ弥打廻り

御細工人無給同懸六人計同固と

組中間式十人計同断

委細之儀いじょう御用処記これあり二有之

右之通り詰居してニ御法通り相濟候上 介しやく

尚親類之者より届出二付 両頭 両御目代一同二致見分候事

一 右相濟候上 右親類呼出し 源助両親之处八

↑40141頁

捨夫扶持持被立下 妻女之儀八無御構い 小供之儀八親類

養育勝手次第被仰付候 直沙汰せし免候事  
右一件相濟候上 直様御土居相届け候事

捨扶持すてがら(田結ある家の廢疾者などを扶助する目的で与えられたわずかな給米)

七月二日

元治元(1864)年甲子七月八月

一 今日爰こゝもと元出立ニ而 京都御進進発之御供として 孰いずれも  
一 応稽古場相揃 八十五時半時より乗船ニ而 萩保福寺  
迄罷出候事

↑42143頁

留守中之儀八 頭暫役 松原八郎兵衛  
被仰付候事

(元治元年七月一九日蛤御門の変)この間の記録なし

七月廿九日

後 今日京師より帰着仕候事(次頁に前あり)

八月廿日

一 澄川米助儀元治元年 当子ノ御土貢方被仰付 御受御礼  
申上候事

八月四日

土貢方(田畑土地の租税調査役)

↑44145頁

前 御土居呼出候二付罷出候处 暫職 増野作左衛門 より  
御沙汰相成候趣 当御時勢二付 先達せんだて而より 松原  
宗右衛門 仏坂出張被仰付候 来る六日より同役中  
申合せ致出勤候様与之儀二付 同役中申合

元治元（1864）年甲子八月

↑48149頁

当年一ノ組之儀二付 身柄出張否二相当り候事

増野勝太

同六日

一 今日より仏坂関門出張二付 證人元ノ筆者兼帯  
と組内より兩人江兼而人選を以令沙汰置候二付  
西尾壮助 爰元迄罷出候筈二候得共 当地之事

岩尾留守中預り

一 大谷岩尾組 大谷千代松 右川與三兵衛より  
願出候 石川松五郎 坂養子 三平儀 本式之  
忌を受候様と之御事 尤跡式願出之日より  
日取被仰付候段申来二付 早速令沙汰候事

同日

↑46147頁

候得者 無其儀直口迄罷出 待候様申越置候二付  
爰元迄罷出不申候事 道具持吉人 御附  
具足箱持手人二候得共 此度八人足送り  
いたし候事

出張人数左之通り

頭ら吉人

組士五人

組中間五人

内吉人證人

郷夫吉人

以上

↑50151頁

一 大谷岩尾組 中村豊槌 石川與兵衛より願出候  
先ノ 仁保源助 廿悴 惣領 政七 三男 妻藏 四男・  
卯吉 五男 米槌 を松井九郎左衛門 育一取組之儀  
申伺候処 願之通り被遂御免与之御事  
一付 早速令沙汰候事

同廿三日

右之通り出勤之内 気分相二付 後番 大谷岩尾  
頼越 半途二而同十三日罷歸り候事 都合十五日詰候事

八月廿日

同廿七日

一 有福吉五郎儀 調製場出勤被仰付  
候段申来り候二付 令沙汰候事

九月八日

↑52 i 53頁【

一 梅地左源太 御中間 浅之丞 御手当御用二付 早速罷出候様申来り候二付 令沙汰候事

同十二日

是迄筆者役 為対 たいして 澄川米助  
苦勞金百疋

是 **迄** 筆者見習同断 高津権之進  
銀壹両

御用処筆者 **於尔時** ときにおいて 西尾壮助  
被召出候事

右之通り申来り候二付 夫々令沙汰候事

↑54 i 55頁【

九月

一 益田親施 旦那様 徳山御滞留二付 組内より **歎願書**  
差出し候事

元治元（1864）年甲子九ノ十月

付り 諸中間同様事

右願書 御家来中之分取縮 一願書一取縮  
相成 御家来中江被差廻 氣附之廉も有之候外  
申出候様授有之候二付 組内江も同様事

十月

一 当年より八 **櫛実** はぜ 是迄之通り中買江勝手 仲買  
次第買取被仰付候条 勝手次第賣拂候而も

益田親施 旦那様 徳山御滞留二付ハ 蛤御門の変で敗戦した長州藩は朝敵の汚名を着せられた。その責任を問われた益田親施は 元治元年八月十五日、徳山操持院に幽閉された。俗論党政府の萩藩は、第一次長州征伐の矛先をかわずのために親施、福原越後、国司信濃の三家老を切腹せしめ幕府に恭順を示した。親施は同年十一月十一日切腹した。この間の事情は「回天実記」に詳述されている。

↑56 i 57頁【

可 しかるべき 然段被仰出候事  
付り 御法も有之候事二付 他所賣被差留 よそつりさしとめられ  
候段 令沙汰候事

同八日

一 先日差出候 **歎願書** 山口御役座受込相成 あいなり  
候二付 御知せ被仰付候事

元治元（1864）年甲子十一月

一 佛坂関門頭ら出張之処 被成御引せ 夫二心し  
組士兩人 同中間兩人 以上四人詰二被仰付候事  
付り 右二付 本々 中村藤馬・石川要左衛門 江  
申付候事 要左衛門気分相二付 内田権平 江  
暫役申付候事

請  
受込引き受ける

↑58159頁

十月十日

一 澄川米助 養子 松井九郎左衛門 育 要藏  
願通り今日被遂御免候付 令沙汰候事

同廿五日

一 澄川米助 死去二付 末期願差出候事 親類 中尾  
栄有福吉五郎 よりも願差出候事

↑60161頁

十一月

一 分高 式石巻斗巻升八合式勺 田方

石川要左衛門

一 同 六石三斗六升三合六勺 田方

岩本貫一郎

右之銘々 知行石二被仰付候分 前書之通り  
附出候二付 記置候事

同十一日

↑62163頁

一 旦那様御事 先達而より徳山御滞留被 遊候二付  
御武運御長久之御祈禱 田万於八幡宮  
執行仕度段 組内より願出候処 願之通り被仰出候二付  
御祈禱物 爰元證人より直様勘場二而筆者頭迄被差出候事  
在中 土分中

十一月十二日  
同十二日

一 旦那様御事 於徳山被遊御逝去 御遺躰  
爰元被遊御歸り 直様大蓋寺御滞棺二付

於徳山被遊御逝去"154155頁の注参照。

↑64165頁

御滞棺中 御棺詰被仰付候事 尤 御願申出候事  
付り 同役 松本良左衛門 留守中 本尾官次  
気(分)相二付 大谷岩尾 申合せ御詰致所勤  
候事

一 初度御法事之節 御詰被仰付 尚御齋御案内被仰付



候事 御備物旧例之通り 御線香箱も三人催合もやい  
相備候事

【166167頁】

一 御三十五日御法事之節も 御備物願出前同様供  
御免二而相備候事

十二月十日

【168169頁】

右之通り本手紙として奥郷里山廻り 石川要左衛門  
事) 申来り候二行 明朝本人呼出二而令沙汰候

梅地左源太  
横田団藏  
中村藤馬

右来慶応元年丑ノ年 御殿算用人家務方  
兼帯被仰付候二行 是又 令沙汰候事もつとも 此三人  
之儀者 勿論呼出二而 可令沙汰筈二候得共 引方共

山廻り(領地の御立山の盗伐枯死その他監視役)

【170171頁】

違候二行 爰元證人代聞二して申遣候事

元治元(1864)年甲子十一月十二月

同十四日

右来慶応元年丑ノ歳 證人役被仰付候段 呼出二而令沙汰候事  
在郷證人 横田秀五郎  
爰元證人 田村賀一

同十六日

一 澄川米助 跡式親類 中尾栄有福吉五郎より願出  
之通り 廿悴 要藏 江家督相續被仰付候事 令沙汰候事

【172173頁】

同日

一 高正院様親施法名 御四九日御取越御法事二行 旧例  
之通り御備物願出候处 願之通り被仰出候二行 相備供  
候事

同十八日

梅地左源太

右明年 御殿御算用人家務方兼帯 此内沙汰  
被仰付候处 御差操之趣も有之 右被差替 須佐

元治元（1864）年甲子十二月、慶応元年（1865）乙丑五月

高正院様＝益田親施法名「高正院殿大義全明居士」

↑74 i 75頁

御米方被仰候一付 早々令沙汰候事  
付り 爰元證人代聞ニ相運候事  
同人事出萩 留守之儀一付 同廿五日帰着之上御礼  
申上候事

同五日

銀言枚折紙

緒方弥左衛門

右当春以来 処々被為对苦勞 銀言枚折紙  
頂戴被仰付候事

鳥目五百文

御中間作左衛門

右当秋以来 御米御せり立打廻りと被（差被）為对苦勞  
頭書被下置候事

鳥目＝243頁注参照。

↑76 i 77頁

同十七日

御書下ケ写

益田右衛門介跡

右家名立遣候段者 先達而申聞せ置候処 鎮靜方  
行届候一付 先知之儀モ弥 以無相違可立遣候条 其旨  
能々相心得 暴動為追討 早々人数可差出候事

右之通り組内江被成御聞せ候条 右二付何楚気附之  
筋共有之候外 おんびニ其趣可申出之段申来り  
候二付 早々令沙汰候事  
一 右本文之儀一付 組内より格別思附無之段 申出一付  
其趣申出置候事

暴動為追討 早々人数可差出＝元治元年十二月十六日、奇兵隊決

起。翌年一月六日から七日にかけて絵堂で激戦有り、奇兵隊が藩政府軍  
に大勝した。かかる情勢下、元治元年十二月十七日、俗論党本藩政府は益  
田家に対して益田石見の指揮下に入り、篠目から山口に進軍して毛利筑  
前と協議の上反乱軍を鎮定するよう指示してきた。（「回天実記」参照）

↑78 i 79頁

慶応元年  
五月朔日

岩本貫一郎

右不屈之趣有之 減地被仰付候処 今盤御家督御首尾能  
被仰出 且從公儀モ非常之大救之御沙汰筋モ有之  
旁二付 不被拘前例後格 厚 思 召之旨を以 先知拾石所  
持被仰付候事

父三平此度順隠居被仰付 内田正一郎  
父圓助同断 中村藤馬

右孰いすれ都合前同断 右三人之者＝是迄御咎被仰付置候事  
父政兵衛同断 三浦平三郎

五月朔日「ここから慶応元年の記述。四月八日改元された。次の記事の日付が閏五月となっているが、閏五月があるのは慶応元年である。この「日誌録」の表紙に「従文久成年正月至元治子年十二月」と記されているが、実際は至慶応元年五月十二月」である。

公儀「萩藩政府。徳川幕府のことは「大公儀」と言った。

↑801頁

慶応元年  
閏五月廿九日

- 一 方今長征之風説日々相迫り候処、素より御人数少之
- 御内輪 内外御手当筋不容易、兄御領分之儀者
- 石州境御備向、嚴重不被行届候而者、兼而被仰出之
- 御趣意も不立、依之段々御詮議之趣、三固屋 御中間
- 相混え、銃隊組立被仰付候条、申合せ稽古令出情候様被
- 仰付候事
- 稽古方之儀者、十日交代二左之通り出勤被仰付候事
- 御馬屋中間 式人宛
- 奥両組中間 拾人宛
- 御台処中間 三人宛
- 拾五人 右奥

長征「第二次長州征伐。慶応二年六月七日、大島口で開戦し「四境戦争」勃発、十九日には幕府軍を掃討。芸州口は六月十四日開戦。幕府軍を広島方面へ圧迫。石州口では六月十七日益田攻略七月十八日浜田城占領。小倉口は六月十七日開戦、八月一日小倉城落城。風雲急を告げる中、將軍家茂薨去によつて幕府は八月二十日停戦の勅命を請い破局を収拾した。

石州境「長州藩防衛体制では「石州口」の防衛は益田家の担当であった。

奥両組「益田家軍制は宇谷、須佐地、瀬尻、市丸の四組。このうち奥両組とは

慶応元年（1865）乙丑五月

宇谷 市丸、海浜両組とは須佐地 瀬尻を指す。何れも現在の田万川地区にあつた。筆者増野勝太は宇谷組頭。

↑821頁

- 一 御馬屋中間 五人宛
- 須佐地・瀬尻  
海浜両組中間 拾人宛
- 吉組五人宛
- 一 御台処中間 五人宛
- 右海辺之部
- 一 右稽古場之儀者、奥海辺と両所一被仰付候事
- 付り、稽古場所柄之儀者、寺社間弁利之処見立申出候事
- 一 稽古引立之儀者、御人撰を以被差出候事
- 一 御飯米之儀者、日別 白金判五合宛、被差立候事
- 一 御定人数之外たり共、自力を以稽古之儀者、勝手次第出勤被仰付候事
- 一 右之通り被仰付候事

白金（銀を10Mほど平たい長田形にのびした通貨）銀の三分に当る

↑841頁

五月廿日？

- 一 組内士分、銃隊稽古と、育英館被差出候条、早速出勤
- 有之段、先達而御沙汰相成居候処、実内々之二而者少々趣も
- 有之候得共、表方之処、当節於地下、内職とは乍申、仕附廉半途之儀一付、来月十日迄之処日延被仰付被下候様願出候一付
- 其段申出候処、願之通り被差免候事、右願二在須佐證人

慶応元年（1865）乙丑六月

田村賀一 在郷證人 横田秀五郎 兩人拙宅罷出候二付

色々前条参り懸り取候事

付り身増野勝太柄取之処二付而者 秀五郎共別べつして而申開無これなき之二付 実八

組内より 少々右二付 出浮人柄有これある之由二付 然らば其人

直様宅江参り候様申附候二付 一応證人引取之上 西尾

壯助 熊谷源内 内田権平 高津権之進 以上

出浮人柄あてにならない人

↑186187頁

四人罷出候二付 前条趣之処種々申聞せ候処 地下湊つまところ之趣有これある之段二而 日延之儀申出候事

縮る処

六月八日

前条御願申出候処 右日限中余分雨天續二付 地下方 仕事大半途二付 何卒今日少し日延之御願申出候二付 先一応前条之趣 物筋迄申出置候事

同十七日

於萩表 少々出???帶事有これあり之 山口より諸隊押出候由申来り候二付 趣次第 諸隊為応 援之御人数被差出事も可有これあるべく之候間 其節 海辺番江合隊二付 一小隊二付御先手二付被差出候段 御沙汰相増野勝太成候二付 組内侍分拾六人 中間分六人江令沙汰候事 付り身柄江 小隊士令司仰付 大谷岩尾江 半隊士令附

↑188189頁

被仰付候事

同廿日

四組中

一 今般 從公儀 御軍制定被仰出候二付 御内輪之儀也 大隊組立二被仰付 已来此旨を以 御規則被相定候 就而者 此度御軍役帳改被仰付候条 此段克々被相心得 弥以 調練可為専務候事

同日

四組中間中

一 今般 從公儀 都合前同断 御軍役改被仰付 候二就而者 是迄御仕方も有之事一候得共 当御時勢 内外之御手当 不容易儀二付 追々御人差を以 撰挙ケ 被仰付 銃隊被召加候条 此段克々相心得 其内孰も

↑190191頁

銃術稽古調練被仰付候事

元治元年 丑ノ六月

同日

須佐地組

右此度大隊組立被仰付候二付 御詮議之筋も有之 兩組合隊と御手組被仰付候条 此段左様可被相心得候事 付り 都合本文通り候得共 於尔時八一組〃〃之御仕方も

可これあるべく有慶応元年之候間 此段兼而相心得可被申候事  
丑ノ六月

須佐地組(田万川) 瀬尻組(田万川)  
於ときにおいて尔時 80、81頁、152、153頁参照。

【192頁】

同廿五日

御用之儀有これあり之候二付 今日より山口罷出候事 留カ守カ中之儀者大谷  
岩尾 江頼置候事

七月十一日

此度御代役様御供二而 罷歸り候事

同日

奥阿武之部之儀者 地下人共 兼而石州方二因  
柄も有これあり之由二候処 当今斯之流説多く候由相聞へ  
御誠意之御手支り二相成候儀二付 養子縁談被

御代役様 蛤御門の愛の責任を取って切腹した三家老の食録は慶応元年三月に復旧した。しかし、益田家は主君益田精次郎幼少のため、一旦代理として六道備中、後見役に支族益田石見、周布治部(益田元祥五男源兵衛。夫人は親施の姉。)の二人が任命された。しかし、その後、同年七月九日、桂主殿が幼主の代役

慶応元年(1865)乙丑七月

に任命された。主殿は仙相院の女嬪、毛利筑前の弟。

【194頁】

差さしゆるされ免候者 父子之間たり共 御国境出入 堅かたく  
被差留候事

丑ノ七月

右之通り御代官所より申来り候由二付 今日組内令沙汰候事 申来り候二付令沙汰候事

七月十四日

一 此度関門別而嚴重二被仰付候 然る処高津住人 笹屋五郎兵衛、吹野屋彦藏、家内之住人、竹屋部三郎、と申者、御詮議之趣も有之、先ツ当分佛坂関門通行被差免候条、右三人之名前者問糺之上

【196頁】

令通行候様 佛坂関門出張之面々へ早速可有御沙汰候事

【198頁】

八月十四日

慶応元年（1865）乙丑八月

先達而せんたうて 瀬 於西ケ河内 下田万村 葛葉刈取として参候二付  
押留一件 此 問申出候処 書面ニテ差出候様 授有之候段  
大谷岩尾 より申伝二付 令其沙汰候処 今日持参二付  
摺置候事 文案左之通り

覚

過る文久式年戌八月 下田万村より瀬尻西ケ河内  
二おいて 葛葉刈取之儀願出 御沙汰有之候次第  
左之通り

葛葉きは 念は小間木。割木等をしばる根はかたくり粉をとる

【200・201頁】

以手紙得御意候 下田万村より葛葉刈取  
之儀二付 先達而瀬尻組二おいて 少々差障り  
之趣有之候処 元来下田万之儀者 葛葉不  
如意而 上納葉差 問も有之哉二相聞 無余儀  
事二相見江候 依之 已来組内 石受場 合壁山  
等相 除 其余之処 西ケ河内辺二而 刈取之儀者 不及  
用捨段 致沙汰候間 此段組内毛可有御沙汰

候 已上

八月廿一日

石津伝右衛門様

益田三郎左衛門

合壁山がっぺきやま (百姓の私有林で山林税を払っていた)

【202・203頁】

右之通り御沙汰有之候 下夫儀出萩留守二付  
暫役江申来り候由之事

右之通り御沙汰有之候処 元来西ケ河内之儀者  
奥之行詰 なら木藪と申処迄 谷二谷二石受有之  
場所柄二而 一統取荒し候而者 石受場妨一毛可相成  
事二付 瀬尻組より参り懸り申出候趣者 西ケ河内程々之  
物境有之 魚切と申処境ニア夫より奥 毛上附近  
外し 妨 不 仕様刈取致候ハ 任せ可申と申出候処

【204・205頁】

其筋相分り 下田万村江も其段申遣 瀬尻組  
之差図を受 物境を授り 其上二而刈取ニ差越候様二  
との御沙汰可有之との儀 一ト通り承り 右二付早速  
下田万庄屋 大谷六郎左衛門へ 瀬尻組 畔頭 半六  
を以申入候趣者 一統二刈取候而者 瀬尻方添筋有之  
儀二付 境立致し 互ニ心遣無之様ニして相済し置  
可申 早速忝兩人差越候ハ 物境を授ケ可申 其  
儀不相済内 刈取差越候時者 差留可申 右躰之

【206・207頁】

儀有之候而者 双方之妨・貫事との儀二付 半六  
申分ニ 此段を御承知可被下と申詰 罷り帰り候  
其後 為何物音も無之 忝年々々と相立候内 元治

元年子ノ夏 下田万より兩人 西ケ河内口刈取致し  
候処 見当り 畔頭 半六 を以差留 近来参り  
懸り有之由二付 罷り帰り候上 役所江今日之参り懸り  
相届候様申聞せ 差返し候 其後為何懸相も  
不仕候処 当七月廿五日 田万村より葛葉取と  
十人斗参り 西ケ河内口 丹後畠 と申処近辺

【208-209頁】

刈取致し候処 不図 横田秀五郎 行懸り 右  
人数之内吉人懸合候処 其者私之了簡を以  
参り候哉 又ハつれより差図を受参り候哉 其方  
名前可 申と取候処 おひ組ノ喜代五郎と申者  
一御座候 役所より取参り候様にと申儀二付 刈取  
二者参り申候と相答 夫二者参り懸り有之 今日者  
取らせ候様不相成 人数中申合せ 早々引取  
致し罷り帰り候上八 役所江其筋相届ケ候様  
二と申付置 秀五郎 八罷り帰り候処 とふも引取も

【210-211頁】

つかまつし  
不 仕様相見候二付 畔頭 半六 其外吉兩人  
詮議二差越候処 其内最寄二而刈取致し  
取り帰り申候 後之儀二而 致し方無之 其儘  
二而難 差置二付 畔頭暫役 民助 を以 下田万 庄屋  
大谷六郎左衛門 方今日之参り懸り申付 差懸相尋  
候処 六郎左衛門 申分二 勝手二刈取り候様御沙汰

慶応元年（1865）乙丑八月

有之候二付 差越候通二申候 民助 申分二者  
御組内江者 左様之御沙汰有之候儀者八承り不申  
何比二兵 右御沙汰有之候哉と相尋候処 六郎左衛門

【212-213頁】

申分二 去年其御沙汰有之候様申候 民助  
申分二 郷江御沙汰有之候ハ 御組江も御沙汰  
可有之筈之様相見江申候 尔 此度私ら差  
越候趣者 葛葉刈取之儀ハ 留置候様との儀  
一付 参り申候 御組一おいても 此段御役所江  
御問出も有之御様子二付 一通り留山之儀ハ御承知  
可被下候 六郎左衛門 江申入候処 承知仕候 何分  
早々御問出御道附相成候様申上可被下 宜様二と  
申込二懸合置 民助 罷り帰り申出候而 六郎左衛門 申分二

【214-215頁】

何共相聞申 兼而境立之儀も 御沙汰  
御差図より懸合候処 聞受ながら 押而勝手  
次第一刈取之処を願出も出来間敷 何之廉も  
無之二 勝手二刈取致し候様成御沙汰も被仰  
出間敷様相考 其上御役替りも無之内之儀 委細  
参り懸りハ御承知之前 何共不審之参り懸り者当惑  
仕候 右是迄之参り懸り申出候間 何分之御沙汰  
奉願候 此段御序之節宜様御取計被成可被下候  
奉頼候 已上

八月

慶応元年（1865）乙丑八月十月

【216-217頁】

横田秀五郎  
田村嘉市  
右之通り書 調 在郷證人 横田秀五郎 持参二行  
追而 職役 増野又十郎 込差出置候事

八月八日

以手紙得御意候 下田万村より葛葉刈取之儀二行  
近年地下あいなり全沙太相 成居候趣これあり毛有之候処  
其後境立も不致 当夏 又候 右懸合場  
処江 地下人葛葉刈取二罷越候由 先達而 申出

【218-219頁】

相成候二行 致詮議見候処 過る成文久二年壬戌 年 御沙汰之  
趣を以 早速境相立候上 刈取二可罷越管之処  
無其儀刈取り候段 不届之儀二行 近年相成  
候趣を以 早速地下よりと合境相立候様 致沙汰  
候間 此段御組内江も可有御沙汰候 以上  
増野勝太様 増野又十郎

前書之通り申来候二行 令沙汰候事

【220-221頁】

十月六日

演説

私組内御中間 文右衛門 当年六拾五歳一相成  
候得共 家續之養子無之二行 御番勤之処も  
事一寄り候而者勤り兼 所詮半間之助勢を以 操合せ  
今日迄 且々相濟せ候得共 当御時勢 別而  
肝要之儀 急場之御用二毛立 兼候二行 於下二  
色々申 養子心遣仕候得共 今 以相応之養子有り兼  
候て

【222-223頁】

難共仕候 然る処彼者実子 当年四十一才二  
相成 至極達者之部一候得共 先年不届之趣二行  
屹度被仰渡筋も有之 至 只 今可被申出儀二而者  
無御座候得共 追々内詮議仕候処 其後甚助儀  
屹度心を改 御沙汰筋之処 誠 以奉恐入 是迄  
之身持引替 行儀相習 於内輪も心を用ひ  
既に当春何か出 来仕候得共 兼而乍 陰も  
御趣意之処者 一都二尊奉し 少も無異心罷居候段

【224-225頁】

神妙之者一候 尚彼者於半間 只今右之人柄  
被召仕候而も 夫二行兎哉角与申儀 少も  
無御座 已前之通り御役向八猶更 其外諸事  
申合せ 御奉公可 仕と申出候間 当御人詰之  
御時節 彼是 甚助 前過之処



御宥免被仰付 文右衛門家續人二被召仕候ハ  
一際相勵ミ 行々相心之御用一毛可相立と存  
候二付 格別之儀申出候間 此段御序之節  
宜様被仰合可被下候 頼存候 以上

増野勝太

【226~227頁】

右之通り厚手紙 調ととのえ二して 暫職 大田丹宮 込差出  
置候事

同月

一 御中間 嘉兵衛 家續之実子無之これなき二付 御中間  
新七 二男 栄藏 と申者 当年十八歳二相あしなり成候を  
所望仕度段 願書先月廿五日 暫役 松本  
唯市 込差出候段承り候二付 願之通り被仰付  
候段 今日令沙汰候事  
一 同ノ 新右衛門 よりも同断二付同断

【228~229頁】

同月

一 右三平儀 御(まかせ)負 一而 調製場取方被仰付候二付  
令沙汰候事 内田三平

慶応元年（1865）乙丑十月

付り 右之手紙 過る二日夜 田万滞留中申来り候共  
朝三日二て 爰元罷り帰り候二付 右之沙汰只様延引二  
相成候事

三平より已前之事也  
横田半次

一 右同断 御負二而 同断被仰付候得共 一心之御請  
申出 其後気分相二付 御断申出候事 御免被仰付候  
同断

【230~231頁】

十月十七日

右七悴甚助事 不屈之趣有之 過る文久元酉并  
屹度被仰渡之筋も有之候処 至近 来候而者前条余程  
令悔悟候二付 偏二類外之  
御了簡を以 已前之通り御遣方可被仰付候条  
厚 御仁惠之程 奉感戴 往々御用一相立  
候様 無緩せ可令爾方候事

瀬尻組ノ

文右衛門

右之通り御沙汰書 傘紙相添申来り候二付 早々

感戴(感じていただく)  
爾(その様に)

慶応元年（1865）乙丑十一月十二日

【2322・2323頁】

令沙汰候事

十一月廿四日

去冬已来 御内輪正俗両立之儀一就而者 乍  
不<sup>はすなから</sup>及私共 御国家之御為筋一途<sup>ひとがたならざる</sup>相考  
尽力周旋仕儀一御座候得共不<sup>これによつて</sup>一方御厄害一立至り  
候段 幾應も奉恐<sup>きよまう</sup>懼候 依<sup>これによつて</sup>之 先差<sup>さしひかえ</sup> 拮居候間  
此段直様御沙汰被成可被下候 以上

正俗（正義改革派）（俗論保守派）

恐懼（おそれいりかこ）

拮控（略字） 扣とも。

【2324・2325頁】

右差拮書 改<sup>あらためて</sup> 而逼塞被仰付候一付 西尾壮輔  
被差下ゲ候事

同廿七日

右当春 回天軍再隊被差免<sup>そせい</sup> 其已来<sup>これより</sup> 届捨<sup>とどめ</sup>二而  
度々之出山 就而者 思<sup>おもひ</sup> 召之旨<sup>めがね</sup>有之 兩度迄  
御直文被差出候共 尊奉之意無<sup>あがまつ</sup>之 臣下<sup>こに</sup>と  
上を輕蔑<sup>あしざま</sup>之心底 何共不相濟事一候 依<sup>これによつて</sup> 之改<sup>あらためて</sup> 而  
逼塞被仰付候事

同月

【2326・2327頁】

右之通り申来り候二付 證人 田村嘉一 在郷江差越  
令<sup>せしめ</sup> 見かじ<sup>め</sup>免候处 謹<sup>つづし</sup> 而御受申上候事  
付り 陸目附<sup>あいな</sup> 後附 打廻り之儀者 御用処より直様  
沙汰相<sup>あいな</sup> 成出張候事

見かじめ（見ヶ）取り締まること。監督すること。

【2328・2329頁】

十二月廿九日

右当夏 旦那様御引越之節 本<sup>もと</sup> 岩本貫一郎 として山口被差出 尚館中本<sup>もと</sup>  
数日所勤 被遂苦勞候一付 銀式兩折紙頂戴被仰付候 同人江

右当春已来 高嶋流稽古出情 且農兵町兵一至迄 銃隊御組立  
一付而者自身<sup>かんかえ</sup> 稽<sup>か</sup> の三ならば御無人之砌 引立方数々被遂心配 追々  
一統芸術相遂候段 引立方行届候故之儀者 被<sup>あそばされ</sup> 遊御祝着  
依<sup>これによつて</sup> 之被成

御意 銀三両 折紙頂戴被仰付候事

田村賀一

右余時御軍政方筆者暫勤被仰付 被遂苦勞候一付 銀式兩 折紙頂戴  
被仰付候事

【240・241頁】

右調製方御武具兼帯元これによつて獨勤  
被仰付 被苦勞致候 依 之金百疋折紙 内田三平

銀三両也 岩本貫一郎 熊谷梅吉 熊谷源内

板井菊藏 高津権之進 横田秀五郎  
熊谷弁藏 内田権平 西尾平七

右当春萩脱走人一件一行而者は 於石州懸留之始末万端  
心遣甚神妙之儀 被思召候 依 之 金百疋折紙頂戴被仰候

増野勝太組 右同断

御中間 良助 御中間 直吉

右当春 萩脱走人一件一行而者は 聞懸ケ飯ノ浦より青原迄罷越

遂苦勞候二付 鳥目八百文被下置候事

萩脱走人一件諸隊は繪堂の戦いで政府方を敗り俗論派政府員棕梨藤太等一行は石州に敗走。益田家は津和野藩と協力して一行を逮捕、萩に送致した。

【242・243頁】

増野勝太組

御中間 久左衛門 好五郎 市左衛門

慶応元年（1865）乙丑十二月

同ノ 兼千代 同ノ 良平 同ノ 次左衛門

同ノ 茂助 同ノ 十郎左衛門 同ノ 浅之丞

同ノ 新七 同ノ 弥三助 同ノ 萬左衛門

増野勝太組 十郎 増野勝太組 御中間 平作

右当春 萩脱走人一件一行而者は 数日遂苦勞神妙  
之事二候 依 之鳥目五百文被下置候事

右合樂場打廻り 被差出 数日 候付 増野勝太組 御中間 平作  
鳥目六百文被下置候事

右当夏 御武具受引除 小遣及御山御賣拂 四人組 利三郎  
二付下積り被差出遂苦勞候二付鳥目四百文同 御中間 惣助

鳥目 びた銭（一文）六あき銭、文銭の事 二十五文（二疋）

【244・245頁】

三百文 御中間 平作 廿尻組

四百文 御中間 市郎左衛門

右一昨年山口 御旅館御詰仕廻 萬事遂苦勞候二付 鳥目  
四百文被下置候事

慶応元年（1865）乙丑十二月

せ尻組

御中間

作左衛門

右当春已来 半紙廻り立 引續御米廻りと打廻り被仰付  
彼是遂苦勞候一付 鳥目六百文被下置候事

増野勝太組

御中間

作左衛門

右明年より御目代方引除 打廻り役被仰付候事

同人組

御中間

新平

右御武具引除小遣と被召出 遂苦勞候一付鳥目  
三百文同断

【246・247頁】

被仰付候事

同廿日

一 今般 従公儀御軍制定被仰出候一付 御内輪  
之処も大隊組立被仰付 已来此旨を以御規則被相定候  
就而者 此度御軍役帳改被仰付候条 此段能々  
被相心得 弥 以調練可為専務候事

四組中間中

同日

一 今般従公儀都合前同断

御軍役改被仰付候 就而者 是迄御仕方も有之事二  
候得共 当御時勢 内外之御手当不容 易儀一付 追々  
御人差を以 撰挙ケ被仰付銃隊被召加候条此段

弥 (246)

【釈文例】

よくよくあいこころえ  
克々相心得  
慶応元年  
丑ノ三月

其内 孰も銃術稽古調練被仰付候事

【元】